

# 俗物根性

—W. M. Thackeray, *The Book of Snobs* を中心に—

太田藤一郎

(1)

イギリスの18世紀は、崩壊しつつあった特権貴族階級と、貿易の発達によって富を蓄積して、次第に社会的発言力を握りつつあった新しい富裕階級とが、手をにぎり合せて結成した一つの混成階級によって支配され、新しい社会問題が生まれ、政党は王党 (The Tories) と民権党 (The Whigs) とに分裂していた。そして国民の大部分はこの二つの政党のいずれかに所属して、日夜政争を事として、この18世紀末においては、貴族階級も新興ブルジョアジーも、破廉恥で、不道德で、無神論者であった。J. Y. T. Greig の指摘するところによると、19世紀ヴィクトリア朝時代の人達は、その殆んどが利己主義者であって、組織化された唯一の社会制度であった家庭と教会によって重圧を加えられたとき、人々は地獄か天国かのいづれか<sup>1)</sup>に行ける自由はあるのだというふりをしつづけた。ダーウィンの「種の起源」の発表によって、彼等はひたすら進歩を信じ、科学は彼等にとって宗教的な尊敬を払う対象となった。科学の発達は急速に社会の慣習、思想を変化させ、その科学を応用して財産をつくり、中産階級として擡頭してきた人達は、彼等の金力をもって、経済的に微力になりつつあった貴族階級の城砦をおとし入れていった。それでもイギリスのこの上流貴族階級は傲慢で、保守的で、俗物気質を持っていた。

アメリカの青年 Warrington は渡英して、親戚の Castlewood 家を訪問したが、留守のため、旅館で淋しく食事をしたのち、村の橋上にただずみ、風景を感慨深くながめているとき、紋章をつけた馬車がやってくる。彼は車中の人物に挨拶するが、返礼してもらえない。車の背後の坐席の軍人も傲慢に彼を見据える。この時彼は怖ろしく孤独を感じたのである。これは *The Virginians* の中で Thackeray が

貴族階級の尊大傲慢な態度を説明している部分である。<sup>2)</sup> また俄成金たちは、上流階級の尊敬するにあたらぬ生活態度を争って模倣しようとしている。妻に遺産がころがり込んで成金になった床屋 Mr. Cox は、早速乗馬練習をやり、晩餐会を催おし、オペラの棧敷を買いとり、新聞に Mr. Coxe Coxe の記事を掲載してもらう。これで効果てきめん、彼は上流階級の一員に加えられるのである。<sup>3)</sup> 名前をダブらして、後に“e”をくっつければ、それで紳士になれる。Thackeray はこのように当世紳士気質をきめつけるのである。

1846年2月28日から翌年の2月27日まで、*Punch* 誌に毎週連載された *The Snobs of England* が後に *The Book of Snobs* と改題された。文学作品としてみると、この作品はいささか退屈である。面白い箇所もあるが、長すぎて繰返えしも多い。けれども、Thackeray の人生体験の具体的な事実の現われとしてみるならば、この作品は極めて重要性をもっている。この作品の前口上 (Prefatory Remarks) のところで、

First, the world was made: then, as a matter of course, Snobs; they  
existed for years and years.<sup>4)</sup>

と Thackeray は、この世の創造と同時に俗物も生れたことを指摘している。俗物は社会のあらゆる階層に存在していて、彼はその俗物を見破る眼を持っていた。そして、

If the Truthful is the Beautiful, it is Beautiful to study even the Snob-  
bish.<sup>5)</sup>

このように、真であることが美しいことであるとするならば、俗物研究も真実の仕事であり、それ故に美しいことであるという根拠の下に、彼の俗物研究にたいする基本的態度が示されるのである。

俗物とは何か? 「くだらない事柄を卑しく尊敬する人間である」(one who meanly admires mean things) と、Thackeray は頗る明快に定義をしている。たとえば、

社会的地位を有難く思うあまり、他のすべての考慮をそれだけに向けてしまうような人物である。Major Arthur Pendennis、彼は毎朝いきつけのクラブで朝食をたべ、新聞、雑誌を読み、出生、死亡欄や上流人士消息欄に目を通し、クラブに姿をみせる知人たちと愉快に語り合いながら、某貴族の催おす宴会のお客の一人として、自分の名前が記載されているかどうかを調べてみなければ満足出来ない退役軍人俗物なのである。<sup>6)</sup> 俗物とは富や社会的地位を極端に尊敬しようとする人間である。くだらないことを卑しく尊敬しようとするのは、富や社会的地位を求めようとする不人情な競争の中で、人間が生れながらに持っている誠実、愛情をおしつぶしてしまうものを包含しているから、家庭生活の悪の根源となる。Vanity Fair においては、野心という粗悪貨を求めるために、凡ての立派なものが売渡されているのではない。しかし、殆んどの人間がとらえられていたくだらない野心に痛めつけられ、その餌食にされそうになりながらも、William Dobbin と Amelia との微弱な、けれども忍耐強い、そして気長な抵抗によって、辛うじて愛情、誠実の結実が示されている。Thackeray は次のように、

With love and simplicity and natural kindness Snobbishness is perpetually  
at war.<sup>7)</sup>

如何に人間のもつ愛情、純真、生れながらの優しさが、俗物根性と対立的立場にあるかを指摘している。そして彼は、*The Book of Snobs* において、一体、どれ程多くの俗物どもが、人間としての自己の姿を見失い、社会の規範から浮き上がり、人生の貴重な時間を浪費し、社会生活の歯車を止めているかを、具体的に列挙しているのである。

(2)

Thackeray は俗物を相対的俗物 (relative snobs) と絶対的俗物 (positive snobs) とに分類している。前者は、ある特定の状態におかれたり、特定の人物と関係を持ったときに俗物根性を持つ俗物であり、後者は、生れつき俗物の性質を具えた俗物である。この両者の俗物度を比較してみると、前者の方は消極的で、弱い、かりに

俗物どものうちの一人ぐらゐの馬力しか具えていないとするならば、後者の方は積極的で、俗物の代表選手になりうる素質を持った者と言えよう。しかし、こういう分類も大した意味がない、というのは、殆んどの人間が俗物根性にかかられているのであり、特定の状態におかれようと、おかれなくとも、現実には立派な俗物になるからである。俗物根性は庶民を俗物にし、いやしくさせるし、貴族を俗物にし、威張らせるのである。

ここに一人の男がいる。彼は豌豆をナイフで食って平然としている輩であり、紳士としての正装でなくて、寝間着、スリッパ姿でパーティに悠然と出席する常識を無視した男である。Thackeray の考えによると、社会には集団生活を維持していくための秩序、規律、基準があり、自分の嫌なことでも我慢して、社会の慣習に従わなければならないことがある。各個人の気儘な行動は許されないというのである。これは明かに社会侮辱型の俗物である。おもうに、ランニングシャツに下駄ばきで教室を横行する学生も、この種の侮辱型俗物であろう。また一般に俗物のあこがれるものは、社会的地位や名誉であって、貴族崇拜は一種の信仰のようなものになってきた。したがって、当時の貴族名鑑 (peerage) は第二の聖書とも考えられたほどである。女王直属の馬丁が姿を現わすと、それまで威勢よくエールを痛飲していた貴族たちの馬丁、従者たちは、忽ち鳴をひそめて部屋の暗い隅にひっこみ、青菜に塩のいたらくである。またイギリスには、「帝国の偉大な靴脱器」(The Great Bootjack of the Empire) という官職がある。この官職に即くことを無上の名誉と心得て、由緒ある貴族が先祖代々就任して陛下の御靴を脱がし奉っている。膝まづいて靴を脱がしてくれている貴族の頭を、陛下はこんこんと空いている方の足で蹴りつけている。これらの人物は王侯俗物とも言うべきもので、国王も人間であり、俗物なのに、権威を盲目的に崇拜する貴族の俗物根性をば Thackeray は嘲笑せずにはいられない。

日曜日、ロンドンのある教会、礼拝後、二人の俗物の会話。A—「あの牧師さんは何んとか牧師で、何んとか伯爵のおかかえ牧師だそうだよ。」B—「おお、そうですか。」と満足して言っている。その牧師のことについては何にもわかっていない、ただ伯爵家おかかえということで満足している。これは爵位崇拜の俗物であって、今日の我々の周囲にもこういう悲しい手合いが少しはいるらしい。ある御立派な侯

爵夫人の旅行記によると、その奥方は船旅をするのが辛いと仰言る。すべての階層、身分の人々と挨拶をしなければならないからである。侯爵夫人は人間との交際が性に合わない、世間の人々より偉いという考えをお持ちなのである。ある日の官報に、Miss Snobky (7歳)とその母 Lady Snobky との旅の身仕度が報ぜられていた。Miss Snobky—訪問着、黄色の南京織ドレス、下着は濃い青豆色のコーディユロイ、髪型は人參巻きのお下げ……。Lady Snobky—宮廷正装、けんらんたる北京織しぼり染め、下着は空色別珍、髪型は鳥の巣、極楽鳥つき……。全くこの俗物に旅に行くのですぞと言いたくなる。官報 (*The Court Circulars*) と俗物との関係斯くの如し。そもそもこれが人の読む記事、Thackeray も大いに慨嘆する—おお、世の人よ、娘よ、おばよ、祖母よ、これがあなたのために新聞がのせる記事なんですぞと。彼は俗物宣伝機関ともいうべき、こういう御用新聞を打倒せよと叫び、こういう新聞を読むと腹が立って、むしろ非国民、大逆犯人、石頭青年連盟の会員になりたいと、義憤をばくはつさせている。ところが、スペインの王が火傷をして、バケツ一杯の水を運ばせるのに、総理大臣から侍従長、侍従武官長、第一側従、馬丁長、女中頭へと命令が伝達されたため、王に水をぶっかける時間がなくなったという新聞記事があった。これこそ Thackeray の溜飲を下げた、たった一つの記事であった。

イギリスの良家と言われる階層には、最も多くの俗物、即ち良家の俗物 (*respectable snobs*) が発見される。その良家の子弟が大学俗物 (*university snobs*) として活躍する。大学俗物の中で、Crump 学長 (爆烈弾学長) こそその最たるものであろう。彼は教職員には教皇に払わせるような敬意を払わせ、学生には雲の上の存在であった。学生は学長から話しかけられて始めて話すことが出来た。ここにも、地位や権威が幅を利かし、教育、真理が不在であることが例証されている。大学俗物として数種類の学生俗物が槍玉にあげられよう。礼拝は皆勤、大学通りを毎日二時間散歩、奨学金を受領、学寮食堂では優等生づらをしている。こういう融通の利かない、型にはまりすぎた、実直すぎる、マジメ学生も俗物である。これとは反対に、安酒、安菓子、下らない話と歌との明け暮れ、ミルク・ボンチに煙草、翌朝のテーブルは目もあてられない惨状、たちこめる煙草の臭気、——学生の本分を忘れた自堕落な学生、これはワイン・パーティ学生俗物 (*wine-party givers*) と呼ばれる種類のものである。また、夕方5時に、入念なおめかし、髪はカール、胸には椿

の花、ピカピカの舞踏靴、白絹のストッキング、キッドの手袋といういでたち、身体中に宝石をつけているいかれた学生、——これはおしやれ俗物 (dressy snobs) と呼ばれるものである。また、ピンクの狐狩姿で校庭を歩き、競馬、ボクシングは必ず見物、夜はトランプに夢になるスポーツ俗物 (sporting snobs)、政治家の猿真似をしたがる思想俗物 (philosophical snobs)、学生俗物もまた多彩を極めている。現代の大学のマージャン学生諸君、自ら願えりみて思いあたる節がないなら、まことに結構である。

イギリスに夏が訪れると、上流階級は言うに及ばず、下々は床屋、靴屋さんに至るまで、それはそれは猫も杓子もヨーロッパ大陸へ物見遊山に出掛ける。その結果夏のロンドンには殆んど空っぽになってしまう有様で、大陸に渡れば箔がつくものと考えて、大陸熱におかされた有難屋の患者を大陸俗物 (continental snobs) と呼ぶのである。彼等は Folkestone の海岸からまるで津波のように大陸に移住を開始する。痩せた娘を両側にかかえ、甲板をうろうろしている、特別扮装の、小柄な、Marquis of Carabas、彼の妻は、大兵の馬丁、フランス生れの侍女と付添い女中を従えた、ぞっとするおめでたい顔付の御令室様である。蠟問屋の若旦那 (young Aldermanbury, the tallow-merchant) はと言えば、全身ポケットだらけのいでたちである。大陸俗物たちは、無知、粗暴、無愛想であり、自惚れ強く、尊大で、大ぼら吹きである。如何なる芸術品にも心を動かされないけれども、お偉方には青菜に塩、ペしゃんこである。

... then the rigid, proud, self-confident, inflexible British Snob can be as humble as a flunkey and as supple as a harlequin.<sup>8)</sup>

彼等は画郎ではフランスの靴みがきにも劣るほど無知であり、卑俗な英語をどなり、大陸のパー、キャペラーに出没する紳士くずれのやくざ俗物であって、多くのイギリス悪党が大陸の刑務所にぶちこまれている。Legg という御仁は何千ポンドという手形を平気でふみ倒し、いつも最上の宿にとまり、最上等のチョコッキ、口ひげ、立派な車を乗りまわしている。国費を無駄に使い、箔をつけるために争って海外旅行をしたがる我国の議員諸公よ、百年前のイギリスの大陸俗物たちと何の点が

相違しているでしょうか。

最後にクラブ俗物 (club snobs) がいる。Thackeray の見解によると、クラブは女性の敵であり、婦人たちはいつもクラブを苦々しく思っているとのことである。夫を家庭から引離して妻をなげかせるクラブには、軍人クラブ、政治家クラブ、ダンディ・クラブ、文人クラブなどの種類がある。Smith 青年は健康体でありながら、三コースの凝った食事をしながら悦に入っているし、中年の Jones は大きな安楽椅子の中で、甘ったるい新刊小説を読み耽っているし、Brown 老人は沢山の新聞をかかえこんでいる欲張り爺さんである。女性悩殺俗物もこのクラブ俗物に属する。即ち Wiggle (ゆらゆら)、Waggle (ひょろひょろ)、この二人の青年は怠け者であり、人間としては無用の存在である。彼等は女が自分の方に気がないと主張して、お互にうねぼれている。しかし、Wiggle が悩殺した由緒ある資産家の麗人とは、誰あろう、四十五歳の、赤毛の、鼻はポンプの柄型で、父は肉屋の、Mary という女である、というのがWaggle の我々に語ってくれた真相である。

## (3)

*The Book of Snobs* の第六章は文壇俗物 (literary snobs) を対象としている。現在の文学界には俗物は一人もいない。文人の態度は謙遜で、その振舞も上品であり、私生活は一点の汚れもない。人気作家は社交界の花形であり、公爵、伯爵よりも上座を占め、貴族はすべて争って文人に近付こうとする。文人は自分の職業に誇りを持ち、温かい同僚愛があり、理解し、尊敬し合う。Thackeray はこういうふう  
に筆を進めていって、以上の記述が全部本当であるとしたら、いったい文壇俗物については何んとも書きようがないではないか、と皮肉っているのである。

If every word of this is true, how, I should like to know, am I to write  
about Literary Snobs?<sup>9)</sup>

まさにその通りであって、現実にはその裏返しなのである。既に文壇に名声を博していた Dickens に、まだ無名の貧しい Thackeray が Dickens の作品の挿絵をかかせて欲しいと申し入れたとき、Dickens はにべもなくその申出を拒絶してい

る。それ以来この二人の文人の仲は極めて悪く、相互の愛情も、理解も、尊敬もなかった。またこの当時の文人にしても歴史家にしても、それぞれが日常の姿勢を失って、権威にたいして平身低頭している。天才を二番目のテーブルに坐わらせる宮廷の組織は俗物組織であり、文芸を無視した社会も俗物社会である。隣人を軽蔑する人間も俗物であり、自分の友人を忘れて、上流階級の人々のあとを追いまわす人間も俗物である。自分の貧しさや職業を恥じる人間も俗物であり、家柄や富を自慢する人間も俗物なのである。

これまでに述べてきたような多数の種類<sup>10)</sup>の俗物たちが、一体どおして生れるのであろうか。それはイギリス国家の制度が俗物根性を崇拜するようにつくられているからである。たとえば、ある人物が富豪になる、戦争に勝つ、弁護士として謝礼をしこたまかせぐ。すると国家はその人物の功績を認め、報酬として、金冠、称号、上院議員の資格を与えるのである。この事実を例証するかのように、Thackerayは戦争の実態を明かにしている。即ち大政治家や將軍たちの名声が国民の間で落ちはじめると、彼等は外国と事をかまえて、大戦争をおこすのである。そして戦に勝つことによって彼等に報いられるものは、絶大の名誉と金銭と勲章なのである。しかし、その戦争によって何の得るところもない一般の男性の大部分は、尊い血を捧げ、女性たちは涙を捧げるのである。即ち戦争とは一、二名の閣下、將軍たちの欲望をみたく大賭博である、と Thackeray は暴露している。客観的現実にたいする彼のこの批判精神が、多くの俗物を発見せしめ、そしてその俗物根性を皮肉らせるのである。我々の国でも、勲章を欲しががる我利々々亡者達の俗物がひしめき合っているのは、面白い風景である。Thackeray は、次のように、

... it seems to me that all English society is cursed by this mammoniacal superstition; and that we are sneaking and bowing and cringing on the one hand, or bullying and scorning on the other, from the lowest to the highest.<sup>10)</sup>

イギリスの社会全体が、拝金教の迷信にとりつかれていることを指摘している。この迷信にとりつかれているから、精神が inflexible になって、融通性を失い、真実を見る能力を欠き、迷路にふみこんでしまうのである。したがって、人間失格は



上流階級の紳士たちにゆずって、一般のわれわれは、生れながらの優しさと真実の友情を失ってはならないと言えるだろう。

平等な社会の組織を望む Thackeray は、上流社会のニュースは御免であり、*The Court Circulars* にはうんざりしている。そして、fashionable, exclusive, aristocratic といった言葉は、キリスト教徒らしからぬ言葉であるから、正直な語彙の中から追放すべきであると、彼は言っている。俗物たちの横暴を怖れては、人々は幸福になれない、お互に愛し合うことも出来ない、真実のやさしい心も干上ってしまう。勇敢な若者たちよ、優しい乙女たちよ、俗物根性の鎖をたち切って、自然が我々に与えてくれた幸福と愛情とを握むようにと、そして彼も家族の者と告別して、剣と槍とをひっさげて、俗物城に乗込んで一戦交えようと、Thackeray は叫びかけている。そして彼は、*Mr. Punch* の仕事として、実際に、こういう俗物たちを嘲笑したのである。ニヤリと笑って、if Fun is good, Truth is still better, and Love best of all ということをお忘れしないで、真実を語ろうとしたのである。

Man is a Drama—of Wonder and Passion, and Mystery and Meanness,  
and Beauty and Truthfulness, and Etcetera. Each Bosom is a Booth in  
Vanity Fair.<sup>11)</sup>

人間は一種のドラマである。人間がこの wonder, passion, mystery, meanness に執われすぎて、それが人間生活に演ぜられると、俗物根性にかられた人間の道化芝居となる。beauty, truthfulness をこの人生の舞台において演じようとする人は、美しい、愛情に生きる、真実の生活を持つことが出来るだろう。Thackeray は、人間の胸のうちに開店された虚栄の市の見世物小屋を、皮肉にそして真面目に、一つ一つその扉を打ち開いていくのである。

## 注

- 1) J. Y. T. Greig, *Thackeray* (Oxford Univ. Press, 1950), p. 100.
- 2) W. M. Thackeray, *The Virginians* (London: John Murray, 1911), p. 15.
- 3) W. M. Thackeray, *Cox's Diary* (London: John Murray, 1911) p. 295.  
cf. ... Mr. Coxe Coxe (that's the way: double your name and stick an "e" to

the end of it, and you are a gentleman at once),...

- 4) W. M. Thackeray, *The Book of Snobs* (New York: Charles Scribner's Sons, 1911), p. 5.
- 5) *Ibid.*, p. 6.
- 6) W. M. Thackeray, *The History of Pendennis* (London: John Murray, 1910), p. 3.
- 7) *The Book of Snobs*, p. 189.
- 8) *Ibid.*, p. 128.
- 9) *Ibid.*, p. 94.
- 10) *Ibid.*, p. 262.
- 11) *Ibid.*, p. 224.